

「空間」を夢あふれる「場所」に変える、黒石市民による「まち育て」

日々、「まち育て」をキーワードに全国各地をめぐり、中心市街地活性化や震災復興まちづくりなどの取り組みを推進している北原啓司先生。

長年、黒石市のまちづくりに尽力されている北原先生より、松の湯交流館の開館に向けたエールをいただきました。

松の湯交流館がオープンする。6年前に、全国の建築・都市計画系の大学院生と教員を50名近く集めて、黒石市で実施した「日本建築学会シャレットワークショップ」。黒石駅からこみせ通りまでの街区を対象に出された提案の中にあつた旧松の湯活用に関するプロポーズ。それが、本当に実現すると思うと感慨深いものがある。10年続けてきている学会のシャレットワークショップで、学生たちの提案が実現するのは、全国で初めての出来事である。オープンを告げるチラシには、「風の人と土の人が交わる場所」という、6年前にみんなで考えたキャッチコピーが踊っている。

黒石市が前鳴海市長を中心とした決断の元に旧松の湯を取得していたとは言え、それを、かつての「空間」から、みんなの「場所」に変えるには、「土の人」の大きなエネルギーと覚悟が必要になる。それをワークショップで縁ができた人々の「風」が後押しすることになって、ついにオープンの日を迎えることになったのである。

「空間」は、人々の想いと生き活きとした行為によって、「場所」に変わる。人々の記憶や関心が薄れていく「空間」を、夢あふれる「場所」に変えることを、私は『まち育て』と呼びたい。黒石市にも都市建築課の中に「まちそだて推進係」が昨年度から設置されている。全国で唯一の部局である。そこに私たちは期待したい。

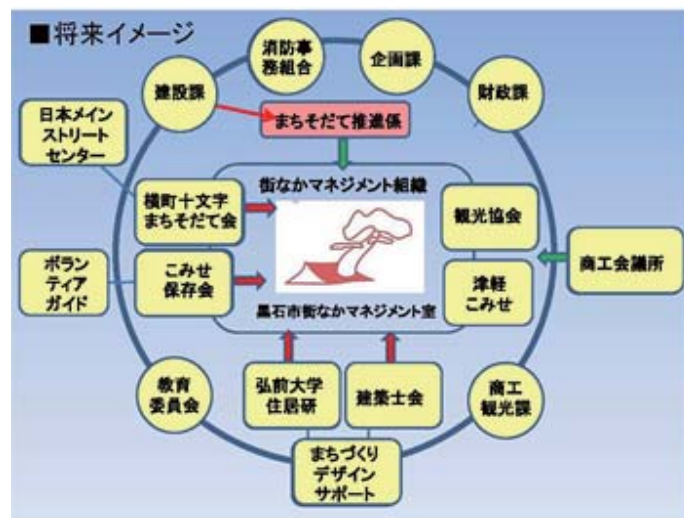
松の湯交流館は生まれるまでの間に、様々な人々のアイデアや意見を巻き込みながら、市内



北原啓司
弘前大学大学院地域社会研究科
長 / 専門は都市計画、コミュニティ・
デザイン / 全国各地のまちづくりに関
する要職に就き、市民参加型のまち
育てを実践している / 著書：『まち育
てのススメ』（弘前大学出版会）他

に多様な活動を生み出していった。街なかをフィールドにするNPOまで誕生している。しかし、本番はこれからである。いわゆるハコモノと呼ばれる公共施設は、完成がゴールだと勘違いする人々が多く、その後それを育てていくためのエネルギーも予算もついていかないことが多い。でも大事なことは、公共が施設をつくるという意味での公共施設ではなく、施設を公共が使いながら育てていくことなのである。前者の公共は「行政」、そして言うまでもなく後者の公共は「市民」である。

さあ、黒石市民は、これをどのように育てて、自分たちの「場所」にしてくれるだろう。下図は、黒石市の職員研修でかつて私が示した「未来予想図」である。きっと黒石市は、高樋市長のもと、実現してくれると思う。



■編集後記

ついにオープンの日を迎えることができました。第5号は「開館記念特別号」として、これまで旧松の湯の再生に携わってきた方やこれから松の湯交流館を利用される方からのメッセージをご紹介しました。松の湯交流館がさまざまな人や出来事の「結び目」となるように、多くの方に足を運んでほしいと思います。メッセージを寄せてくださった皆様に心より感謝申し上げます。

松の湯レターは第1号から第5号まで、さまざまな分野で活躍される多くの方にご登場いただきました。その実践の軌跡や黒石への思い、そして先人達の思いを取材で伺い、改めて、黒石のまちづくりの可能性や魅力を実感することができました。

これから松の湯交流館で誰が何を創造し、どんな物語が生まれていくのか…とても楽しみです。

さて、松の湯レターは、松の湯交流館の開館後、館の広報紙としてリニューアルします。どうぞお楽しみに！

松の湯レター 第5号
発行日：平成27年7月16日
発行：黒石市 / 企画制作：NPO まちづくり
デザインサポート / 編集：津田純佳 / 表紙デ
ザイン：小田洋介 / イラスト：青木万理子 /
協力：北原啓司、佐藤未佳、高橋潤、野澤康

開館記念特別号★

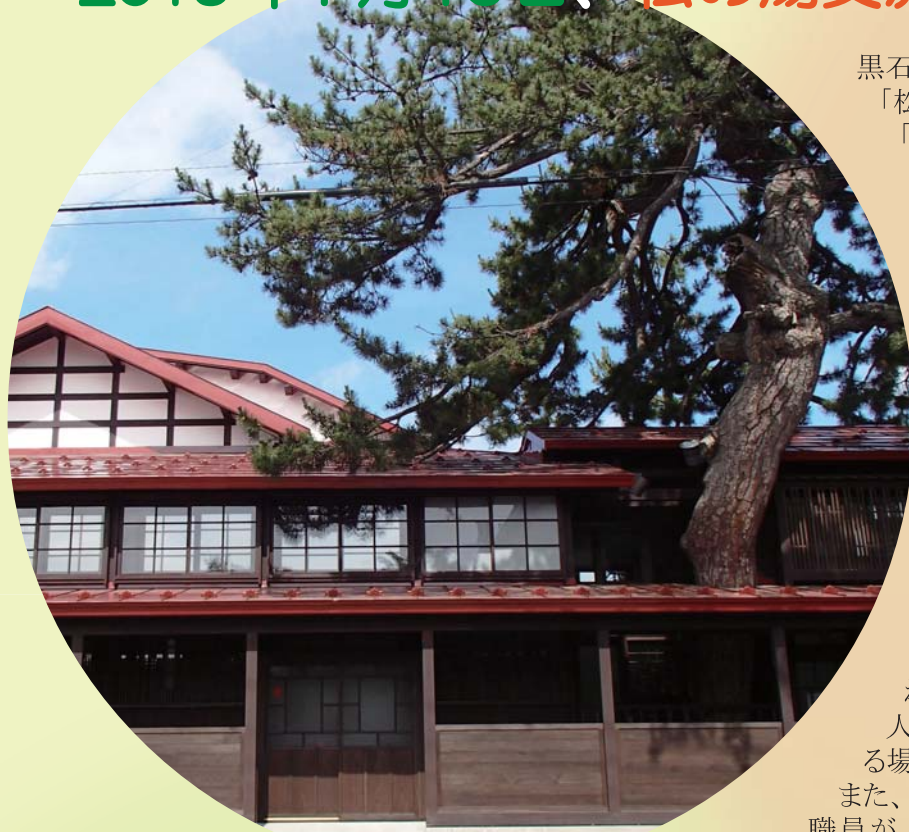
こんにちは、松の湯交流館がオープンします。

松の湯レター 第5号

No.5 / 2015年7月



2015年7月16日、「松の湯交流館」がOPENします！



黒石市中町と甲徳兵衛町が交差する場所に、新たに「松の湯交流館」が開館します。

「松の湯交流館」は、まちなかのにぎわいと活力を生み出す拠点として、「観光」「コミュニティ」「地域の防災」をキーワードとして運営していきます。

伝統的建造物群保存地区に立地する銭湯「旧松の湯」を文化庁の補助を得て市が取得したのは平成20年のこと。その後、市内外のさまざまな方の協力のもと、「旧松の湯」の再生を進めてきました。地元子ども達やこみせ保存会、青森県建築士会（南黒支部）などの「土の人」から、弘前大学の北原啓司教授と研究室の学生、建築学会主催のシャレットワークショップ（平成21年）で黒石市に合宿しながらまちづくりを学んだ全国の学生達と、指導にあたった先生方などの「風の人」まで、実に多くの方の応援によって「松の湯交流館」はオープンを迎えることができました。これからも、「土の人」と「風の人」が集い、人と人がつながり、まちづくりのアイデアが生まれ続ける場となってほしいです。

また、「松の湯交流館」には、市まちそだて推進係の職員が「まちそだて室」に常駐しています。いつでも、気軽にお声がけください！

開館に寄せて、皆様から頂いたメッセージをご紹介します！

松の湯交流館のご近所さん。一緒にまちを盛り上げます！

そこには、いつも聞き上手な人がいて、だれでも何でも気軽に話しあえる場所になってほしい。そこから何か生まれるだろう。

鳴海文四郎（鳴海醸造店）

地域コミュニティとして気軽に立ち寄れる場所であること。来黒の方へは、心の癒しとなれたらと思います。寺山正幸（寺山餅店）

中町こみせ通りの観光の拠点として利用できる施設になってほしい。また、銭湯が復活すれば、なお利用客が増えると思う。

松村定世（松葉堂まつむら）

あらゆる世代、団体が交流し、意見やアイデアを出し合い話し合えるような場になってほしい。（こけし工房 木楽）

町人も時代とともに変化中、地元の人が日常的に足を運ぶ場所であった松の湯の復活に、継承と発展を期待！！

高橋直大（高橋家・横町十文字まちそだて会）



風の人も、土の人も楽しめる場に・・・

積木、あやとり、双六、びだ・・・。座敷狭しと遊びまわる子供達の歓声。ようやく通じる津軽弁の道案内。いつでもにぎやかな場であってほしい。三上昌一（黒石商工会議所）

じっ ぼっ わげもの わらす ほか

「爺ちゃ・婆ちゃ・若者・子供コ・他から来た人」も坪庭を観ながら、「湯ッコ」さ入ったみたいにほんわか気分で黒石談義。小野せつ子（こみせ観光ボランティアガイドの会）

旧松の湯に携わった多くの人達の努力に感謝し、生まれ変わった「松の湯交流館」を市民のサロンとしてまた観光の拠点として盛り上げていきたいです。

端田裕花（NPO 法人 横町十文字まちそだて会）



銭湯だった旧松の湯を「松の湯交流館」へと再生させるため、調査や設計、施工・・・担当しました。

これからは守り人として。

地元の人と旅人が、そして旅人同士が出合い・交わり・繋がる、大きなネットワークの核となる様な建物になってほしいです。そして、そのネットワークを生かし、黒石のファンになって貰いリピーターがどんどん増える事を願っています。

野呂晋一（青森県建築士会 南黒支部）



中庭では大石武学流庭園の特長を知ることができますので、庭巡りの拠点として、また市民の憩いの場所となってほしい。高橋晃司（高橋造園）

松の湯交流館に、大工として携わり貴重な経験をさせていただきました。名前の通り、観光客・地域の人が集まれるような、黒石の新たな目玉となってほしいです。村岡功聖（村岡建設）

沢山の市民の皆様からお話を伺い、無限の可能性を感じながら空間を作るという幸せな仕事をさせていただきました。どうぞ、その可能性が実現され、愛される施設となりますように。工事関係者の方々への感謝とともに、一同の願いとして。高橋潤（アルキメディア設計研究所）

子どもも生徒も学生も、これからの担い手たちが活躍できる場！

松の湯が銭湯だった時代の事は知りませんが、松の湯交流館となり市民の交流の場として新たにスタートすることとなり大変うれしく思います。銭湯だったころ色々な人たちが裸のお付き合いをしていた場と思いますが、そのお付き合いの気持ちが松の湯交流館としてこれからも長く続いていくことをねがっています。浅原圭介（黒石保善園（保育士））

僕的には荷物を預けさせてくれたり、自転車を止めさせてくれたりなど、気軽に足を運べる所になってほしいです。成田剛（中郷中学校（2年））

障害のある子もいない子も一緒に活動できる空間になって、時にはホッと安心できる場所になってほしいと思います。

渡邊加世子（青森県立黒石養護学校（教諭））

これまでとこれからの物語を紡ぐ担い手になりたいです。佐藤未佳（弘前大学大学院（大学院生））



建築学会のシャレットワークショップで出会った松の湯。社会人になっても関わることが嬉しいです。

多くの人に関わりながらここまで来た松の湯・・・これからどんな物語を生み育んでいくのか、とても楽しみです！

青木万理子（シャレットワークショップ参加・都市環境研究所）

どの世代からも愛される場所、また来たくなる場所、来てほしいと思える場所になってほしいです。小田洋介（シャレットワークショップ参加・会社員）

松の湯とは学生の頃に会いました。黒石でお世話になった方々や当時の学生メンバーと、またここで集まるのが楽しみです。

藪谷祐介（シャレットワークショップ参加・札幌市立大学（特任助教））

地域の皆さんが慣れ親しんだ「松の湯」が再生され、新たな「まちの顔・へそ」として、笑顔あふれる楽しい溜まり場になることを期待します！

野澤康（シャレットワークショップ指導・工学院大学（教授））

地域の“宝もの”を活かしていきます！・・・まちの将来に向けて。

黒石市の良さは、ゆったりとした時間を過ごせることです。松の湯交流館もその一つです。人との交わり、自分自身を見つめ直し、リフレッシュする場として活用してください。

高樋憲（黒石市長）

松の湯交流館が市民一人一人の心の居場所となり、活力を授かるパワースポットになってほしいと願っています。

阿保淳士（黒石市教育委員会教育長）

